

「武庫川国文」第八十六号 抜刷
平成三十一年三月二十日 発行

citation and similar papers at core.ac.uk

brought to

しまくま山

影山尚之

しまくま山

影 山 尚 之

玉勝間 嶋熊山之 夕晩 獨可君之 山道將越

一云 暮霧尔 長戀為年 寐不勝可母

(12・三一九三)

萬葉集卷十二「悲別歌」に右の一首が配列される。旅を契機とする歌であれば歌中の地名の理解にまず比重がかかるが、「しまくま山」については諸注釈いずれも未詳としている。「八雲御抄」卷五は摂津国の山名と認識したものの、同国歌枕としてのちに継承されることはなかった。歌書のうち右を収載するのは『綺語抄』(上 坤儀)および『袖中抄』(卷十六)を見る程度であり、引用はともに本文歌のみ、勅撰集ならびに主要な私撰集、私家集にこの山が詠まれることはない。『萬葉代匠記』初稿本は「御抄」の判断に触れて、

推量するに、さきの玉かつまあへ嶋山とつ、けたるを、津の國とおほしめしけるに、これもおなし枕詞を置たるに、おほしめしたかへられけるにや

と順徳天皇の失考を推測、同精撰本に「此前後各二首、アツマノ名所ヲヨメル中ニアレハ、若東國ニ有ニヤ」とした。ただし、東日本にも「しまくま」の山名は容易に見つけられない。

大阪府豊中市緑丘二丁目所在の豊中不動尊境内には当該三一九三歌を刻んだ歌碑が建つ(写真1)。建立は昭和四十一年、揮毫者は歌人・安田青風。あたり一帯をいま「島熊山」と称しており、阪急

バス停留所に「島熊山」(写真2)、同地を通る中央環状線に「島熊山北」交差点がある。近世には存在を確かめられる地名で、『撰津名所図会』(寛政十年刊)に、

嶋熊山(熊野田村の北にあり、一名鬼ヶ嶽といふ、千里山の山脈つゞきて險阻崔嵬たり、山中に大巖多し)⁽²⁾

とある。ただし、いつまで遡れるかは不明と言わざるをえない。『角川日本地名大辞典 大阪府』は右の記述をも踏まえてであろう、

往時は險しく、鬼が棲むといい、鬼ヶ嶽とも呼ばれ、寂蓮は「玉かつましまくま山の夕暮にひとりか君の山路こゆらむ」(新古今集)と詠んだが、現在、付近は高級住宅街として知られ、昔

日の面影は消えた。

と記すけれども、「往時」「昔日」についての具体的な言及はない。そもそも新古今集に右の寂蓮歌は載らず、このあたりの情報源は『大阪府全志』(大正十一年刊)にあるらしい。同書は「島熊山」の項の下に、

萬葉 玉かつましまくま山の夕暮にひとりか君の山路こゆらん

を挙げ、次項に「八阪神社」の記述を続けた。そのためか、豊中市熊野町三丁目鎮座の八坂神社社頭には由緒案内を掲げて冒頭に右の歌をそのままうつし取っている(写真3)。郷土の顕彰はよいこと

だが、著しく信頼度の低い知見の拡散は歓迎できない。



写真1 豊中不動尊境内歌碑



写真2 島熊山バス停



写真3 熊野町八坂神社由緒

*

*

*

「悲別歌」は三二八〇歌から三二二〇歌までの三十一首、その配列原理については小野寛氏『萬葉集全注巻第十二』に、

第一首は正述心緒的な歌、第二首からは寄物陳思的な歌が、人事（衣、鏡）、地象（山、原、島、川、海、舟）、植物（山草、海藻）、天象（月、雲）、動物（雉）の順に並べられている。

と説くのが適切だ。三二八六歌から三二九五歌まで十首が「山」に関する内容、とりわけ山越えの別離を嘆く歌々で占められ、『萬葉集私注六』が指摘するとおりその前半五首は山の所在地を明示しな

いもの、後半の五首は具体的な地名・山名をうたうもの、と対照的に配置されている。後半五首を左に示す。

(12・三一九二)

草陰の荒蘭の崎の笠島を見つつか君が山路越ゆらむ

(12・三一九二)

一に云ふ「み坂越ゆらむ」

(12・三一九三)

玉かつま島熊山の夕暮にひとりか君が山路越ゆらむ

(12・三一九四)

息の緒に我が思ふ君は鶏が鳴く東の坂を今日か越ゆらむ

(12・三一九五)

このように酷似した歌を連続させるのは、詠み込まれる地理の変化を有意とするからにほかなるまい（ただし、「木綿間山」「荒蘭の崎の笠島」「磐城山」はいずれも所在地未詳。当該本文歌について『萬葉集私注』は「前の歌の變形と見てもよい位である。旅人を慰めるために、土地土地に行はれた民謡なのであらう」と述べる。「島熊山」を「夕暮れ」に「ひとり」越える際の格別な感慨をもつて迎え入れる土壌が存在したということであろう。

山を越える時点で意識を注ぐ詠は集中に多い。それらのうちには、周知のことながら、

妹に恋ひ我が越え行けば背の山の妹に恋ひずてあるがとしさ

のように自身が山越えする折の詠と、

我が背子はいづく行くらむ沖つ藻の名張の山を今日か越ゆらむ

(7・二二〇八「羈旅作」)

(1・四三)「當麻真人麻呂妻作歌」

など親しい他者(多くは異性)の行旅を思いやる類とが併存する。右とはちがって山の名を明示しない例、

二人行けど行き過ぎ難き秋山をいかにか君がひとり越ゆらむ

(2・一〇六)大伯皇女

曇り夜のたどきも知らぬ山越えています君をばいつとか待たむ

(12・三二八六)「悲別歌」

は歌を授受する当事者間に地理情報が共有されているためと見られ、この類型のむしろ大半が、

大坂を我が越え来れば二上にもみち葉流るしぐれ降りつつ

(10・二二八五)

真木の葉のしなふ勢能山しのはずて我が越え行けば木の葉知り
けむ

あさもよし紀伊へ行く君が真土山越ゆらむ今日そ雨な降りそね

(9・二六八〇)

周防にある磐国山を越えむ日は手向よくせよ荒しその道

(4・五六七)

のように越えゆく山名を旅人も家人もことさらに言語化するのだった。「越勢能山時阿閉皇女御作歌」(1・三五)、「丹比真人笠麻呂往紀伊國超勢能山時作歌」(3・二八五)、「五年癸酉超草香山時神社忌寸老麻呂作歌」(6・九七六)、「夏四月大伴坂上郎女奉拜賀茂神社之時使超相坂山望見近江海而晚頭還來作歌」(6・一〇一七)など特定の山の通過を作歌契機として題詞に記録する事例が見える点にも注意しなければならない。

これらの山が、越えてゆくことに心理的な負荷や抵抗を感じさせ

る境界の地としてとらえられていたことはまちがいない、それは中央官人とその家人らの間に共通認識を確立していた。右に引いたかぎりでも、

背山—南海道紀ノ川北岸 名張山—大和伊賀国境

大坂—穴虫越え大和河内国境 真土山—紀伊道大和紀伊国境

磐国山—山陽道欽明路峠越え? 草香山—大和河内国境

相(逢)坂山—東海・東山・北陸三道の要所山城近江国境

という次第でいずれも官道もしくはそれに準ずる要路上に位置したことが知られる。そうでなければ都に残る家人にとつて遠隔地の山名までを認知することは容易でない。

難所として聞こえた坂もあれば、八世紀にはもはや深刻な緊張を要しないほどに整えられた道もあったにちがいない。だが、どちらにしても嚴重な手向けとともに山越えの不安を訴え、たとえ複数の同行者があろうと、

朝霧に濡れにし衣干さずしてひとりか君が山路越ゆらむ

(9・一六六六)「岡本宮御宇天皇幸紀伊國時歌」

のように夫の身の上を切実に案じるのが前代より受け継ぐ旅の文化だった。個別一回的な旅の愁いと嘆きはいつしか普遍性を獲得して知識層の間に蓄えられてゆく。

*

*

*

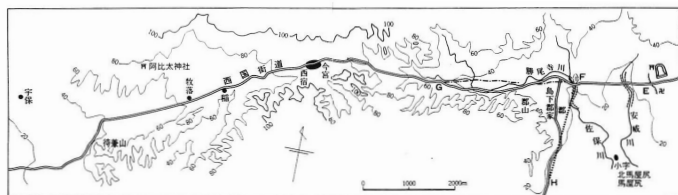
歴史地理学が復原想定した古代山陽道は、摂津国嶋下郡の郡衙(現、茨木市郡付近)から今宮牧落を経て待兼山の北を通過する(付図)。近世の西国街道、いまの国道一七一号線にほぼ沿う道筋である。それは豊中市の島熊山(以下、歌中のそれと区別するため《島熊山》



写真4 島熊山の坂道

と表示する) から大きくは外れないけれども、南へおよそ二キロメートルばかり逸れている。当地は昭和四五年大阪万博を機に急速にニュータウン開発が進んだ地域に含まれ、地形と景観はその前後で劇的に変貌を遂げたが、それでも《島熊山》の四周には今なお相当の傾斜が残り(写真4)、中央環状線は「島熊山北」交差点から西へ長い下り坂が続く。前掲『角川日本地名大辞典 大阪府』は標高を一一五・八メートルとするものの、その数値以上に険阻な坂道であったことを思わせる実況である。二キロ北方に整備された駅路が設けられているならば、

仮にここを通過する生活道路が存在したとしても、旅人がわざわざ《島熊山》を越えるルートを選択することは考えがたい。もとよりそこは国境にはあらず、豊島・河邊郡境にもなお若干の距離があるので、これかれ勘案するに《島熊山》は万葉の「島熊



付図(足利健亮氏『日本古代地理研究』による)

山」に相応しい地とは見られない。

万葉集中に「夕暮れ」の山越えをうたう歌は当該例を除くと次の二首しかない。

おし照る 難波を過ぎて うちなびく 草香の山を 夕暮に

我が越え来れば 山も狭に 咲けるあしびの 悪しからぬ 君をいつしか 行きてはや見む (8・一四二八「草香山歌」)

白雲の 龍田の山を 夕暮に うち越え行けば 瀧の上の 桜

の花は 咲きたるは 散り過ぎにけり 含めるは 咲き継ぎぬべし こちごちの 花の盛りに 見さずとも かにもかくにも

君がみ行きは 今にしあるべし

(9・一七四九「春三月諸卿大夫等下難波時歌」)

前者は日下(草香)越え、後者は龍田越え、いずれも往来繁多な河内―大和間の移動である。夕暮れ時に山越えの武断が選択されうるのは、前提として越えた先に安定的な宿泊地が確保されているからだ。草香を過ぎて故郷大和に戻る前者は言うに及ばず、後者についても龍田を越えた地点に竹原井頓宮をはじめ河内国分寺や智識寺など公の施設の点在が認められる。生命の危機回避が確信されるからこそ夕暮れをおして山を越えるのである。

西下する旅人が《島熊山》を越えることがあったとして、宿泊予定地を周辺に求めるとすれば、葦屋駅は遙かに遠いので、第一に想定されるのは豊島郡家であろう。『新修豊中市史』はそれを現・池田市石橋周辺に求め、

石橋から蛭池にかけて広がる宮の前・蛭池北両遺跡の地に豊嶋郡家が所在した可能性は極めて高いものと思われる。

とする。それならば《島熊山》からは四キロばかり、決して長い距

離ではない。しかしながらそこにアクセスするにも山陽道の利用が圧倒的に便宜であり、南へ迂回する意味は見いだせない。⁷⁾

さらに、当該歌に異伝が付随することを思うと、鳥熊山をよぎる交通行為が一定の頻度に達し、鳥熊山周辺における宿泊の事実が蓄積されていたことが予測される。異伝歌は、

玉かつま鳥熊山の夕霧に長恋しつゝ寝ねかてぬかも
とあって、旅人は鳥熊山を間近に見やられる地点で故郷を思いやり
つつ夜を過ごしている。

* * *

『萬葉集私注』は枕詞「たまかつま」が地名「鳥熊山」を導く説明を与えにくところから、当該歌を、

玉かつま安倍鳥山の夕露に旅寝えせめや長きこの夜を

(12・三一五二)

の「轉訛」であるとし、「アベシマヤマがシマクマヤマに變つたものの、枕詞を取り換へることを忘れて、玉かつまを其のままに
してしまつたものと見るべきだらう」「一に云ふの方は、それ故
(三一五二) から先に出て來たもので、それが更にこの本文歌に
なつたと見える」と推定したが、一首がそんな杜撰な経緯により生
じた詠歌とは思われない。枕詞と被枕詞との関係は不審のまま残さ
ざるをえないけれども、本文は旅ゆく夫の身の上を案じる歌、異伝
はそれを承けて妻への恋慕を募らせる歌、一次的唱和として成り
立つたものかどうかは別にして、読者はこれを一組の妹背の哀切な
応答と受けとめるのがよいだろう。妻は想念の中に夕暮れの鳥熊山
を描き、夫は夕霧に包まれた鳥熊山を眼前にしている。アフ(逢)

に係るを標準とする枕詞は、この男女の、逢えない現状への悲嘆と
再び逢うことへの願望とを的確に言い取っていると読むこともでき
そうである。⁸⁾

：玉垂の 越智の大野の 朝露に 玉裳はひづち 夕霧に 衣
は濡れて 草枕 旅寝かもする 逢はぬ君故 (2・一九四)
：朝雲に 鶴は乱れ 夕霧に かはづは騒く 見るごとに 音
のみし泣かゆ 古思へば (3・三三四)
葦の葉に夕霧立ちて鴨が音の寒き夕し汝をば偲はむ

(14・三五七〇)

「夕霧」はしばしば旅人を深い憂いへと誘い、眼前しない対象への
恋情を無性に募らせる。「長恋」を文字通りに解するかぎり、旅
人は妻のもとを出立の後それなりの日数を経ていなければならな
い。

行きて見て来れば恋しき浅香潟山越しに置きて寝ねかてぬかも

(11・二六九八 寄物陳思)

山に隔てられてあることが旅人の不安をかき立て、慕情はいっそう
深くなる。

* * *

結局のところ「鳥熊山」はどこと知られない。だが、萬葉集卷
十二はいくぶん風変わりなこの山名に普遍的な「悲別」の情を汲む
とともに孤独な異境の趣きを印象したのであるう。「八雲御抄」の
識見がついに受け入れられなかったのは、その孤独感と畿内摂津と
がしつくりと結びつきにくい点に由来するのかもしれない。

注

1 歌碑に関する情報は田村泰秀氏編、富田敏子氏補『萬葉二千三百碑』（平成30年、万葉の大和路を歩く会編）が詳しい。

2 『名所図会』にいう「熊野田村」と「鳥熊山」とが関連のある地名だとすれば、「熊野田村」の称は中世に遡る。平凡社『日本歴史地名大系 大阪府の地名Ⅰ』は応永八年（一四〇一）七月注進「春日社領垂水西牧田数帳」（今西家文書）中の「熊野田村拾町」を引いている。

3 影山尚之「草香山を越える」（『歌のおこない 万葉集と古代の韻文』和泉書院、平成29年）

4 足利健亮氏「摂津を東西に貫いた計画山陽道の復原」（『日本古代地理研究』大明堂、昭和60年）、木下良氏『事典 日本古代の道と駅』吉川弘文館、平成21年）など。

5 豊島・河邊郡境は猪名川。万葉集中に「猪名」の地を詠むものは六例を数え、河口に水門の設定される同地は都人の意識するところだった。なお、「我妹子に猪名野は見せつ名次山角の松原いつか示さむ」（3・27九、「しな」が鳥猪名野を来れば有間山夕霧立ちぬ宿りはなくて」（7・11四〇））によれば旅人は猪名野を北上していると見られ、足利健亮氏が「難波京から有馬温泉を指した計画古道」（『前掲書所収』）で想定した、難波京より北上する山陽道を利用している可能性が考えられる。『続日本紀』天平十六年二月戊午条「取三嶋路、行幸紫香樂宮」を参看するにつけても、七、八世紀にはこのルートの利用がむしろ頻繁だったようである。

6 『新修豊中市史 第一巻通史二』（平成21年）第二章第三節

7 歌枕「たまさか」は地理的に見て豊島郡家に接近する。元良親王集に、
つのくにに、たまさかといふところに、しりおき給へる女

てしまなる名をたまさかの玉坂に思ひ出でもあはれといはん

（二六九）

があり、『枕草子』「山は」に「山は、…待ちかね山、たまさか山、耳なし山」と見え、『能因歌枕』にも摂津国歌枕として「たまさか山」を載せている。近世の玉坂村は現・池田市石橋一〜三丁目および豊中市石橋麻田町あたりという。歌枕化の促進には「偶さか」への連想のおもしろさが寄与したのだらうが、あわせてそこが交通の要衝地であったことも人びとの興味を喚起する要因であったと考えられる。

8 枕詞「たまかつま」は万葉集中に三例、当該歌と『私注』に引く三一五二歌のほかには「玉かつま（玉勝間）逢はむと言ふは誰なるか逢へる時さへ面隠しする」（12・29一六）がある。身と蓋とが「合フ」意をもつて動詞「逢フ」ならびに類音の地名「安倍」を導くと説明される。

9 『萬葉集釈注六』は「熊」は「隈」の意で、恐怖心をかき立てる国境の山であるゆえに、この名があるのかもしれない」と注する。指摘は思いつきの域を出ないが、それに似た何らかの連想を育みそうな地名にはちがいない。

（かげやま・ひさゆき 本学教授）